

## 「声」と向き合う

荒井 英治郎 (信州大学学術研究院総合人間科学系)

### 1. はじめに

本稿は、2021年度に開講した教職科目(選択)「現代社会と教育問題」(2022年1月18日)の授業にオンラインゲストとしてご参加いただいたゲストティーチャー(武田緑氏: Demo代表)の講演内容を再構成したものである。記録作成に当たっては、本学の学生である曾根愛結さんに尽力いただいた。記して感謝を申し上げたい。

### 2. ゲストティーチャーの話

#### (1) 自己紹介

【ゲスト】武田緑と申します。私は結構色々な活動をバラバラと行ってきましたが、「声」を聞くというテーマで全部繋がっているなとも感じています。

今日は「声と向き合う」というテーマを頂きまして、私自身大切にしたいなと思っています。

この School Voice Project という、学校現場の教職員の人達の声を集め、見える化をして社会に届けて、色々な立場の違う人との対話の場を作り、それによって学校教育をより良くしていこうというプロジェクトを昨年スタートしました。

一時期、一般社団法人の代表をしていたこともあるのですが、今は個人事業主フリーランスの形で、「Demo」という屋号で教

育ファシリテーターを名乗って活動しています。活動テーマとしては、人権教育、フリースクール、オルタナティブ教育なども含めた多様な学びや教育のあり方、学校内外の連携や社会の創り手として、子どもたち若者たちが育っていくための教育、シティズンシップ教育などをテーマにして活動しています。

では、「教育ファシリテーター」とは何かということですが、一番多いのは教職員研修をしています。学校や委員会に呼んでいただいて、なるべくワークショップ型で研修をやらしてもらうスタイルだったり、自分自身でテーマを設けて企画して、自分が話をしたりファシリテートしたりすること、ゲストをお招きしてコーディネートすることなど、教育研修会のイベントを作ったりしています。

こうしたことの派生で、教育視察のツアーを作ることもしていまして、国内からスタートしましたが、今は海外にも広げて、色々な教育の形を見に行き、自分の実践や自分の当たり前を問い直す視点を得ようという企画をしています。

そして、先ほどの **School Voice Project** というのは、現職の教員の方や元教員の方達と一緒に、実際に現場の声を社会に届けて、閉塞感漂う学校教育の状況を打破する活動を展開していけたらいいなと思っています。なお、ご紹介していただいた『読んで旅する日本と世界の色とりどりの教育』（教育開発研究所、2021年）は、去年出した本です。ご興味があれば、読んでみてください。この本は後で少し話をしますが、教育視察で国内外の色々な現場を回ってきたことを追体験してもらおう本となっています。

私は、「教育ファシリテーター」と名乗っているのですが、簡単に言うと「ファシリテート」とは「促進する」や「簡単にする」という意味がある言葉です。では、何を「促進」「簡単」にするのか、私なりの理解としては、まず自分の中で考えたり、自分の感情をつかまえたりするということが、それを外に出す、表現するということがした後、Aさん Bさん Cさんのそれぞれが表現した中にあったものが外に出てきて、その表現されたもの同士が、いい形で相互作用を引き起こすことができるようにコミュニケーションのサポートをする、これがファシリテーションです。教育の分野でずっと活動してきた中で、このファシリテーションが重要だと思っています。

しかし、実際には話し合いのスキルなどが必要で、うまくいかないと、言いたいことが言えなかったなという経験や、話し合ってもどうせうまくいかないし、自分の声など聞かれないのだなという経験が、降り積もってしまいます。そうすると、社会に参画することや、自分の声を発することには意味があるのだという感覚を、子ども時代からだんだん奪われて失っていくことが実際に起こってしまっているように思います。それを転換するためにも、学校教育や学校組織が変わる必要があると感じています。もちろん現場は学校でなくて地域でもいいのです。ただ私は、学校教育の分野でこういう経験を子どもたちが積めるような実態を作っていきたいなと思って活動しています。

## (2) EDUTRIP

【ゲスト】では、私の来歴と共に、話題を提供したいと思います。

私は地域に根ざして育ち、活動もしてきた人間です。私の生まれ育った地域は大阪市内のそれなりに都会のエリアで、周囲に畑とか一切なく、市営住宅が立ち並んでいるエリアでした。公営住宅が多いエリアということもあって、経済的に困窮していたり、シングル家庭が多かったり、在日コリアンの家庭や被差別部落と言われる歴史的に差別を受けてきた地域が含まれていたり、社会的マイノリティや生活や教育上の困難を抱えやすい人たちがたくさん暮らしている地域で生まれ育ちました。ですので、人権教育や、マイノリティの子どもたちのエンパワーメントという、自分に

自信を持って、生きていけるような教育が盛んなところでした。例えば、学校の中でも自分のルーツや社会的な立場をカミングアウトする取り組みが盛んにあったり、お互いの社会的背景を理解し合いながら、安心して学校生活を送れるようにしようとか、それに加えて社会にある色々な問題について知り、その問題は自分の問題であり、自分の友達の生きづらさにつながる問題だよ、と言うようなことを子ども時代からかなり勉強して育ちました。今こうやって社会変革に繋げるような活動をしている根底には子ども時代の経験があると思っています。

子ども時代はすごく学校で楽しく過ごしましたし、自分が学校で子どもとして過ごしている間に学んだことで大切なことをたくさん吸収させてもらったなと思っています。ただ、公立の学校で、例えば校則などの学校のルールみたいなことは、当然のように先生が決めて上から降りてくる感じでしたし、子ども達の学校運営への参画や、子どもたちの意見が学校生活で反映されていくことがあったかという、そうでもなかったかなという実感もあります。

私は18歳の時に「ピースボート」に参加しまして、アフリカや中南米を回るコースで、現地でスラムの子どもたちとサッカーするとか、先住民族のコミュニティを訪問して先住民族が受けてきた差別の歴史を学ぶことなどを経験しました。たった3ヵ月だったのですけれども、すごく濃密でした。一番大きかったのは、今まで学校の中で先生に教わってきた色々な知識についてピースボートの上で議論したことで

す。私自身も、小中学校時代に社会の色々な問題について学校の中でディスカッションする機会が比較的多かったのですが、アジアを通っている時に過去の戦争に関する歴史認識の話や、ニュージーランド人の環境活動家の方が乗ってきて捕鯨問題について話をすることがありました。彼は環境活動家なので捕鯨反対論者だったのですが、それに日本人の参加者が真っ向から反対する、賛否分かれるようなテーマを船の上でたくさん議論をする機会があり、自分の価値観や、この問題については自分はどう考えるのか、たくさん問われる時間を船の上で過ごしました。

後は、当時18歳で、同世代ぐらいで小学校から不登校でほとんど学校に行かずに今まで育ちましたという子が船に乗ってきていたり、暴走族に入って手を焼いていて無理やり乗せられたやんちゃ系の男の子がいたりしました。日本社会で何気なく小中高校と出て、その中では出会わなかったような人生経験を送っている同世代とたくさん出会えたことは大きな経験でした。その中で「自分の意見を持つとは、どういうことだろうか」、「自分の意見だと今まで私が思ってたものは、大人の受け売りで流されてただけなのかもしれない」とか、「自分で小中高校の後、大学に行って、就職活動して、会社に入るのだろうか」とか、もしくは「教員採用試験を受けて先生になるつもり」ぐらいの幅で将来の選択肢を考えていたけれど、例えば、フリーランスでやっている人がいるとか、起業している人がいるとか、学校を作っている人がいるとか、「もっと自由に考えて自分の手で作っていい」、「ある中から選ばなければい

けないと思っていたけれど、なければ作ってもいいのだな」といったことをたくさん考えさせてくれました。

そして、「私は教育にやっぱり興味がある」と思ったので、その後、既存の学校教育について「今の学校は本当にこれで良いのか」、「時代に合わせてもっと変わっていった方がいいのではないか」とか、海外や国内にも、もっと子ども主体の形で自分たちでルールを決めたり、学校運営している教育の場もあるらしいことが分かってきました。

そこで「EDUTRIP」という多様な教育を学ぶ旅をスタートさせました。詳しい説明は割愛しますが、日本で言うと、いわゆる不登校の子が通うフリースクール、子ども食堂などの地域で福祉的なケアが必要な子を受け止めているような場所、既存の学校教育とは違う理念で運営されているオルタナティブスクール、プレイパークや冒険遊び場などを色々回ってきました。それが海外にも広がって、オランダ、デンマーク、フィンランド、韓国、フィジー、タイなどを回るツアーをしてきました。これは、「より良い教育があるからみんなで見に行き、日本に持ち帰って真似しよう」という旅ではなく、「自分たちが当たり前だと思っている教育や考え方と違うものに触れることで、みんなで何がいいんだろう」と自分自身の教育観や、日本の当たり前を見つめ直すための鏡みたいな存在としての視察先の企画をしてきました。

2、30代中心の15人ぐらいのメンバーで行って、その人たちと同じものを見て、でも同じものを見てもみんな感想が違うのですよね。ある訪問先に行き、ものす

ごく共感して「私はこういうことがやりたいのだ」となる人もいれば、「めっちゃモヤモヤ違和感を覚えてなんか気持ち悪い」という人もいます。その気持ち悪さなどの感覚をお互いに、何がそんなにモヤモヤするんだろうとか、何でいいと思ったかを丁寧に向き合ったり対話したりしていくことですごく学びがあるなと思っています。

「EDUTRIP」は、現地に訪問する形なのですが、その博覧会バージョンみたいなものとして「エデュコレ」というものもやっています。これは日本の現場ですけど、日本の多種多様な教育現場や子どもの現場に丸1日会場貸し切って、50団体とか集まってもらって、ブースを出してもらったり、体験ワークショップをしてもらったり、この日1日会場に来たら「EDUTRIP」10回ぶんぐらい色々な教育に出会えます、という取り組みをしています。

### (3) 「教育の民主化」と「教育による民主化」

【ゲスト】大学時代から20代前半にかけてはこういう活動をたくさんやっていました。しかし、学生時代から一緒にやっていた仲間が22、3歳以降ぐらいからだんだん学校の先生になったり、現場に出ていくわけです。そのあと何が起こるかと言うと、「こんな学校教育がいいな」とか、「自分を大事にしたいぞ」みたいな思いを持って現場に入っていた人たちが、結構しんどくなっていったのです。「これなんか変だぞ」みたいなアンテナを高めて欲しいと思って私は活動していましたし、仲間もそうい

うところを共有して、現場に入ってくれていたのですが、何か変だと思った時に、どうやって変えていけるのかとか、「おかしくない、これは正しいことだ、大事なことだ」と思っている、価値観の違う人たちとどう関わっていけばいいのか、こんな授業がいい、こんな教室がいい、こんなクラスがいいという理想はあるのだけれども、なかなか経験と力が足りず、それを教室では実現できないということも起こっていきます。そうすると、どうしても支援学校に毎日働きに行くことがしんどくなり、理想を高く持っていれば持っているほどしんどいので、現場に合わせて諦めるということが身近にありました。

「当たり前を疑う」、これは教育業界でここ数年とても言われるようになってきましたし、私もこの10年来言ってきたことです。でも「揺さぶる」だけは無責任だと思うようになったのです。揺さぶるだけ揺さぶって、どうにかするのは、あなたが現場で頑張ってください、どうにかする仕方は教えないし、どうにかする時にもがいていることに寄り添わないっていうことでは、あまりにも酷いなというふうに思うようになりました。

例えば、教職員研修とかではもう少し中に入って、できるだけ連続で呼んでもらうようにして、変化に伴走することをなるべくやらせてもらえるような形に研修を切り替えたりとか、SNSを通して現場の人と近い関係性になりながら、しんどい時に話を聞いたり、みんなの困りごとを持ち寄って、一緒にどうしていけばいいかを考えたりするような小さな輪の中でお互いに支えられるようなコミュニティづくりをす

ることを始めました。

結局、自分自身は何をしたいのかと言うと、「教育の民主化」と「教育による民主化」ということになります。学校教育とか子どもたちが学んで育っていく社会環境を民主的に、民主的とは、一人ひとりが大切にされる、一人ひとりの声が聞かれて、受け止められて、それによって環境が変わっていくことだと私は思っているのですが、教育現場が子どもたちの声をより聞きながら、子ども達が居心地の良い、子どもたちが望むような場が変わっていくべきだと思っています。

もう一つは、私もお世話になったリヒテルズ直子さんが「学校は民主主義の練習をするところだ」とおっしゃるのですが、民主的な教育環境、学校環境で子どもたちが育つ、つまり自分たちが何か声を発したら声は聞いてもらえるし、その声によって周囲の環境が変わっていくし、変えていけることを教育の中で実感しながら大人になることができれば、社会がもっと良くなっていくはずだと思っています。結局、私はそれがやりたいのだと思っています。言い換えると、民主的な環境のもとで、民主的な社会を創っていける力を育んでいきたいということです。

民主的な環境で、民主的な力を育んでいくためには、最初の土台として、「私はこんなニーズを持っている」、「私はこれが好きで、これが嫌で、今こんな風を感じてる」というような自分自身にアクセスしているということがすごく重要だと思います。このかけがえのない「自分の」、「この私の気持ち」、「私のニーズ」が大切であるということをおぼえていることが大事です。そ

の上で私にとってこれが大事なように、他の人にも、他の人の思いやニーズがあって、それがバッティングすることがある、対立することがある。例えば、幼稚園の子どもで、「私はままごとがしたい」、「私はサッカーがしたい」と、お互いに相手が欲しいけどやりたいことは違う。じゃあ、どうしよう。先にままごとをして、後でサッカーをしようとするのか、色々な解決方法があるかもしれないですけど、そういう自分にアクセスしている状態の先に、他者と対話する、コミュニケーションができる、合意形成ができる、対立解消ができるということにつながっていき、「じゃあ私たちのクラスとか、地域とか、この範囲のたくさんの人たちがいる、このコミュニティにおいてはどんなルールがあればみんな心地よく過ごしているかな」とか、「どんな、文化を共有していけたらいいかな」とか、そういうコミュニティのあり方を考えることがあって、その実感が降り積もった先に「選挙で投票しよう」ということになるのではないかと思います。

お見せしているスライドで言うと、デモクラシーの階段の「Get access to myself (自分の望むものを知っている)」「Get access to others (自分とは違う他者と対話する)」ということについて、練習する場がなさすぎるのではないかと、私自身は感じています。学校現場ですと、デモクラシーに関するトピックについて学ぶことはありますが、私が大事にされているとか、私の権利が守られてるといったことがベースになると、「自分が侵害されているのに差別されてる人の話をされても」ということが起こると思います。

#### (4) School Voice Project

【ゲスト】そこで、去年始めたのが School Voice Project です。これは要するに子どもたちが意見表明できて、自分の声には価値があると思えて、「私たちが動けば社会を創っていけるんだ、変えていけるんだ」というときに、それは大人もその感覚を持っているかという疑問があるわけですね。特に教職員の置かれてる立場を考えた時に、労働者としての権利が守られてないことがたくさんあるし、学校で自分たちが一番子どもたちの様子を見て、課題が何かもわかっているのに、上から降りてきた方針に振り回されて、自分たちの声は全然聞かれないとか、僕らの声は聞かれ、尊重されているとか、私たちの現場における専門性がきちんとリスペクトされているとか、そういう風に思えない状況が学校の先生達にあるのだとしたら、その状態の人達に子ども達にそれを育んで下さいというのは相当酷な話だと思うわけです。どっちが先とかではなくて、両方同時にやっていかなければいけないと思うのですが、先生たちの声、教職員の声聞こえるということと、子どもたちの声が聞かれるって言うことは一緒に進んでいくのだろうなと思っていて、先生たちのスタンスが変わったり、先生達が元気になることで子どもたちに与えるプラスの影響はすごく大きいと思うので、私は先生達をエンパワメントする、「自分たちの力があるな」と感じられるような社会環境を作りたいと思い、「声を届けるプロジェクト」として、まずはアンケートサイトを作って、政策提言できたり、

「ちょっと待って」という事態が起こった時に、現場から声をあげられるとか、「もっとこうした方が、あの現場の視点からすると子どもたちのためになりますよ」といったことを社会に発信していけるようなプラットフォームを作り始めたところで

### (5) 質疑応答

【参加者】周りの環境を変える時は、周りの声を聞いた上で取り組んでいくことが大事だと思いました。学校教育の「当たり前」が疑われているという話は、確かにそうだなと思っています。今の学校教育の問題を解決していくには、「当たり前」と向き合って、色々な声を集めていくことで、物事が変わっていくのかなと感じました。

【参加者】話を聞いていて、行動範囲がすごく広いなと感じました。チラシを見つけても、自分で行こうと思えなかったり、その間にみんなどんどん進んでいってしまうし、大学も一年休学すると、みんなと一年ズレしてしまうし、自分がみんなに基準を合わせて考えているなということがわかり、もっと自分の考えを明確にしていけたらいいなと思いました。

【ゲスト】あまり参考にはならないかもしれませんが、私は「多動性」と「衝動性」が高くて、面白いと思った時にストップをかけるのが難しいタイプの人です。そういう意味では、先ほどコミュニティスペースを作るといっても、物件を見つけてワクワクしちゃって、その日に契約した

りしましたが、ともすれば危ないことですね。慎重に考えることも大事だとは思いつつ、私自身、結構勢いでここまでできてしまったということはありますが、勢いがあるから開けてきたものも確かにあると思っています。

子どもの時から忘れ物も多くて、「何で忘れるの!」「だって忘れるんだもの」みたいに泣く子どもでしたし、未だにうっかりしてしまうことがいっぱいあって、自分で対策できるようになってきたのは、大学生くらいだと思います。

【参加者】すごく面白い話が聞けましたが、個人的にあまり入ってこなかったことがありました。それが「教育の民主化」のところですか。「子どものため」とありましたが、学校は多くの子どもは自分たちで選んで入ることはできていないと思います。しかし、そのような中で公教育に求められていることとして、子どもたちのために学校を変えて行くと言われますが、子どもの意見がどうやって反映されているのかがあんまり見えてきません。子ども達に合った教育が行われていくためには、自分達が頑張っていることは本当に正しいことなのかどうか、独りよがりになっていないか、大人の取り組みが本当に子どものためになっているのかが引っ掛かりました。

【ゲスト】とても大事なことだと思います。「子どものため」というのは確かにちょっと主語が大きすぎると思うのですよね。例えば、オルタナティブスクールの仕組みや文化は、この子とこの子にはあってハッピーに過ごせるけど、この子には合わなくて

しんどいみたいなことがあるはずです。私はオルタナティブスクールは作りたいように作ってもいいのではないかと思います。合う子がそこにアクセスできるということが保障されれば、それで救われる子はたくさんいると思います。

ただ地域の学校の先生にとってのクラスづくりや授業づくりを考えた時には、このやり方で一人一人にとってどうなのかなと常に方法を疑ったり、自分のモノの見方を疑ったりすることは本当に重要だと思います。

【参加者】ピースボートの話の時に「自分はこの大人の意見の受け売りで流されていたんじゃないか」というエピソードが自分に刺さりました。ご紹介いただいた教員による政策提言はとても良いことだと思って、今の若い先生は何々を変えてやろうということはあると思いますが、校長先生や教育委員会は、なるべく問題を起こさず、既存のもので進めていきたいという人が多いと思うので、若い先生が変えることは難しいかなと感じました。

【ゲスト】そうですね。学校管理職ではない先生の声が教育委員会に届くためには、今の仕組みでいうと基本的には校長先生が、現場の声を「現場ではこうなっているからこういうサポートが必要です」と伝えるのがベースの仕組みになっていると思います。ただ、声の出口が「校長」という窓口しかない点は、結局声として出て行かないこともあって、違う出口も作ることは、やりたいことのひとつです。ただ校長先生や教育委員会の人にも変えたい人はたく

さんいて、若い先生の中にもあまり変えたくない人もいます。その辺は、年代だけでは語れないところがあると思います。

【参加者】School Voice Project が印象に残っています。その上で、今感じられている問題点を教えてください。

【ゲスト】全部現在進行形で悩みながら進めています。ユーザーが増えないとソーシャルインパクトは低い。ユーザーが増えるにはもっとどうしたらいいのかということ、政策提言や政策変更をどのように成功させることができるかということ、政治的に右だとか左だとかバランスを欠いていると支えてくれる人も減るので、慎重に検討しています。また、回答者のモチベーションをどう高めるかは重要です。登録者が増えても回答してくれる人の割合が低いと、「死んだ」プラットフォームになってしまいます。登録してくれたユーザーのメリットとして今伝えていることは、コンビニのように、オンラインのプラットフォームとして、学習会の場やリフレクションの場、教育時事ネタを多く話す喋り場などを設けたり、掲示板のファシリテーションみたいなことをやっていこうとしています。

例えば、Twitterの「教師のバトン」は、匿名性が高いことで荒れやすいということがあったと思います。それに関しては結構悩んで、本名と所属校の名前を載せてもらうかどうか大きな判断だったのですが、それをすると多分登録者数が伸びないけれど、信頼性は高いところで、今のところ任意にしています。ですが自治体名、職種、校務分掌など細かく登録してもらう



形になってています。ユーザー登録制にすることで、一定の信頼性を得ていると思います。特に初期は口コミを大事にしている、SNSでも発信はしていますが、信頼関係のある先生達から数珠繋ぎ的に登録者を増やすことを頑張っているところです。

【参加者】「教育の民主化」について引っかけかかっています。変えたいと思っている方が実際はどれぐらいいるのかという点が気になっていて、小中高の子どもは、そんなに変えたいと思っている人がいるのかなと疑問に思っています。もしかして、これも大人の「押し付け」になるのではないかと、今のままがいいのに変えようとしなないといけないといった雰囲気を作って、子どもを圧迫しているのではないかとこの点も感じています。

【ゲスト】ありがとうございます。一つは声を聞くとか、声をあげるということは、「わー！」みたいな印象になりますね。私は、子どもは大きい声をみんながいるところで主張するというイメージだと、したくない人がたくさんいると思います。でも黙っている人にも声はあるのですよね。黙っている人にも内側に声があって、みんなの前では言いたくない人の声も聞ける環境を作らないといけないと思うし、拾えるコミュニケーションをしないといけないと思っていますのですね。

また、例えば、校則の場合は、「どっちでもいい」という人もたくさんいると思うし、「意見が無い」という意見もあるかと思いますが、「意見が無い」という意見なんだねということが普通に受け止められ

るべきではないかと思っています。でも、「今の校則を死守したい」という主張の人もいたら、その声も聞きたいと思います。私は対話のファシリテーションをする時に、一つの意見に対してA派とB派が出るような場合、A派ばかりが話をしていたら、でもBという意見もあると思いますと言ってみたいと思います。そうすると、Bの人が「いや実は私はそう思った」「私はそっち派で」と言いやすくなったりします。これもファシリテーションの技術の一つですよね。こうしたファシリテーションができる人が世の中全体で増えたらいいなと思います。そして各所にそれができる人が増えたら、民主主義に対して、なんか疑いの眼差しで見えてしまう、見ないといけない状況は減らせるのかなと思いました。

【参加者】今日一番響いたことは、視察を通じて「真似しよう」ではなく、「何がいいんだろう」と考える機会を得ることが、視察の意義だとおっしゃられていた点です。今の教育は、いい大学に行っているいい会社に入ってというイメージがありますが、上辺だけではなくて内部まで見て考えることができる人を増やしていくことが重要だと思いました。

【参加者】日本人の特性なのか、同調圧力というものがあるって、それで自分の意見を多数派と一致させたいとなり、個人が消えてしまうことがあります。それが匿名になると急に自分の意見が言えて、個人が復活するという逆転現象が起きています。

【参加者】すごく共感できることが多かつ

たです。コミュニケーションの話になりますが、自分は結構コミュニケーション好きなのですが、ちょっとしんどくなる時もあります。それは他人と比較してしまうときです。コミュニケーションを通して、相手の価値観とか、相手がどう思っているのかを聞くことにはなりますが、私は他人の「忙しい」という話を聞くことがすごく苦手です。そういう話を聞くと、自分が今しんどいと思っていることはそんなにしんどくないのではないかと思って、自己肯定感を保つのが難しくなったりします。他者とコミュニケーションをとる中で、どのようなスタンスで臨めばいいのでしょうか。

【ゲスト】一つは他人が言ってないことを深読みしすぎないことです。私たちには「汲み取ろう」とする癖があると思うのです。相手が気を悪くしているのではないかと、嫌われたのではないかと、言葉にされていないことを汲み取って、勝手にダメージを受けたりしますが、私はそれをしてないことを心がけています。逆に、気がなった時はあえて聞くようにしてみます。「なんか今、ごめんちょっと表情が曇ったかなと思ったのだけど嫌やった？」というふうに、汲み取らずにあえて確認するということですかね。また、自分にベクトルが向いてしんどくなってしまうことに対しては、そこはやっぱり人と自分は良くも悪くも違って、人生の道程も、色々なことのペースも違うことだし、違っていい、こういうふうに捉えた方が自分は精神的に楽かなと思っています。

今回のように言葉にできている時点で、その問題に取り組んでいくスタートライ

ンに立っている感じがします。

【参加者】ファシリテーターの話のところで、A派の人ばかりが話をされていてB派の人が話せない雰囲気になるということがあると言われていましたが、ファシリテーターは同調圧力や空気を読めるけれど、あえて読まない人なのだなと感じました。

【ゲスト】面白いですね。確かにそういうこともします。ファシリテーターは、私の意見ですけど、何をしてもいいのですよ。それが結果的に「促進」することになればいいと思っています。ちょっと高度なテクニックとしては、あえて対立を激化させて雨降って地固まるようにもっていくこともやってもいいと思います。ファシリテーションはその時々、どこに目的を置くかによって色々な技術を使いながらやるものだと思います。

【参加者】先ほど「大人」と「子ども」の間のギャップの話がありましたが、子どもが本当にその大人がやろうとしていることをやりたいかどうかというのが気になりました。例えば、社会全体の政策を変えるのは、大人ですよ。でも子どもはその親の影響、大人世代の影響を受けて育ちますので、今の大人が思っている大人の変化と、子どもの変化にズレがあると思います。大人の固定概念が崩れると、子どもの概念も崩れていくという感じです。ズレがあるのに政策を変えるのは大人ですので、子どもの意見を政策に反映させることはできない、子どもの意見を直接大人を通さずに政策に影響させていくシステムは作

れないものか、疑問に思いました。

【ゲスト】すごく重要な観点だなと思いました。子どもの声を聞いて大人が代弁する「子どもコミッショナー」とか、「アドボカシー」とか、「子どもオンブズマン」とか、子どもの声を聞いて子どもの声を政策や環境改善に反映させるシステムは自治体レベルであります。あとは、最近では、日本若者協議会という団体があって、ここは高校生、大学生など、若者の当事者が政策提言をしています。また、愛知県新城市では若者議会というのがあって、若者議会に1千万円の予算がついて、新城の若者たちが自分たちの町を良くするために話し合っていて、実際に実行することをしてしています。

すごく楽しくて、もっと喋りたいです。皆さんが今日、「まとまらないんですけど」と言いながらも話してくれたことの一つ一つにすごい大事な視点や面白い視点がたくさんあると思いました。「声にならない声」も含めて、声は大切なので、自分の中にある声をまずは自分で大切に聞いてあげてほしいなと思いますし、言えそうな人からでいいので、外に出してみることも少しずつしながら成功体験を積み上げていくと、言いにくい場でも言えるようになっていったりすると思います。大人はそのような成功体験を積んでいけるような環境を必死で用意すべきだなと改めて思いました。ありがとうございました。